

フィッカー、ツェラン、ハイデガー¹

オーストリア戦後抒情詩の展開とトラークル像の変遷

日名 淳裕

1. ミューラウへのまわり道

一年にも満たないウィーン滞在ののちにふたたび追われるようにしてパリへと旅立った詩人パウル・ツェラン（1920-1970）は、その途上にわざわざインスブルックを経由してゲオルク・トラークルの墓を訪れている。1948年7月5日から8日にかけてのこととされるこのインスブルック滞在の目的は、チロルの雑誌『ブレンナー（Der Brenner）』編集長ルートヴィヒ・フォン・フィッカー（1880-1967）への挨拶であった。この面会を仲介したのは、ツェランが1947年12月にブダペスト経由でウィーンにやってきた時に知り合った、同郷の友人アルフレート・マルグル・シュペルバーの知人である雑誌編集長のotto・バジル²、そしておなじくウィーンで知り合った画家エドガー・ジュネとその妻エリカだった。この興味深いエピソードについて証言する資料は少ないのだが、ツェラン自身がブカレスト時代の恋人ルト・ラックナーに宛てた手紙のなかで短く報告している。

昨日はミューラウに行ったよ、トラークルが埋葬されている教会の墓地にね。僕は花を持って行った、[...]途中で柳の木から小枝をとって、君からのものとして墓のうえに置いたよ。夕方にはトラークルの友人、ルートヴィヒ・フォン・フィッカーの家で詩をいくつか読んだ。分かると思うけど、僕はとてもごちなかった。でもフィッカーは、僕にはエルゼ・ラスカー=シューラーの遺産を相続する資格があると言ったんだ。ラスカー=シューラーはフィッカーたちにとっては、トラークルとおなじく本物のポエジーの化身なんだ。彼女自身がしばしばミューラウの戸外にいたし、彼女の連作詩の一章は、〈チロルの領主ルートヴィヒ・フォン・フィッカーとその美しいスウェーデン女性に〉捧げられている。〈美しいスウェーデン女性〉、フィッカーの奥さんはいまや老婆さ[...]。彼女は僕がラスカー=シューラーに似ていると思ってい

¹ 本稿は2013年7月22日から26日にかけてベルリン・フンボルト大学で行われたワークショップ „The Power of Colour. Farbmacht und Farbkraft“ における発表原稿 „Farbkraft in den Werken Georg Trakls und ihre Entwicklung bei Paul Celan — Trakls ‚Delirium‘ und Celans ‚Erinnerung an Frankreich‘“ を日本語に直して加筆したものである。

² Walter Methlagl: Paul Celan in Mühlau. In: »Displaced« Paul Celan in Wien 1947-1948. Hg. Peter Goßens und Marcus G. Patka im Auftrag des Jüdischen Museums Wien. Frankfurt/M. 2001, S.121-130, hier S.123

る一僕がまだ詩を読むまえにそう言ったんだよ。きっといつまでもそう思っているんだろう [...]。1週間くらいでパリに行くよ。³

手紙の日付は7月6日となっている。トラークルの墓を訪れた5日の夕べ、ツェランはフィッカーとその家族のまえで自分の詩を朗読した。そこでフィッカーがラスカー=シュューラーを引き合いに出したのは、後述のように、おそらくあらかじめ計算されたことだったのである。しかしそれだけに、手紙から読みとれるツェランの喜ぼうとする様子が強い印象をのこす。おなじ出来事についてツェランは、同日付のシュペルバーに宛てた手紙のなかではいたって冷静に分析している。

トラークルの友人の前で詩を読むことは簡単なことではありませんでした、ルートヴィヒ・フォン・フィッカーはもはや若い世代には属していませんから —あと二年で七十歳になります— そういう人にあっては、トラークルのような詩人との友情をほかの詩人たちには閉ざすということが考えられます、とりわけその友の墓のすぐそばに住んでいるならば —ミューラウの墓地からフィッカーが住んでいる家まではほとんど三百歩もないのです— そして私は実際に、望むようには受け入れてもらえないだろうと思っていました。それがまったく違ったときの私の喜びについてはお分かりでしょう。気おくれと、そしてフィッカーの耳がいくらか遠かったために、ウィーンでしばしばそうであったように、詩をうまく読めなかったにも関わらず（以前よりはずいぶんうまく読めるのですが）、私にはラスカー=シュューラーの遺産を相続する資格があると言われたのです。この言葉を聞いても最初のうちは、正確なことは何も分かりませんでした、なぜなら私には一恥ずべきことですが—エルゼ・ラスカー=シュューラーの詩にはたとえばトラークルやエリュアールにたいするよりは、強いといってもずっと乏しい結びつきしかなかったのです。さらに私には、彼女の詩がフィッカーにとってどんな意味を持つのかということが分かりませんでした。しかしそれからかれは、ラスカー=シュューラーの最後の詩集「青いピアノ（Das blaue Klavier）」⁴を書き物机からとりあげて、彼女がフィッカーにとって、トラークルとおなじくらい多くを意味する詩人だと分かるように語りはじめました。かれはトラークル自身もしばしば彼女に多くを負っていると思っていたのです。そしてかれは私に、あたかも私がかれらのうちの一人であるかのように語りかけたのです。とりわけ嬉しかったのは、かれがしっかりと私の詩のユダヤ的なものに言及したことでした —お分かりでしょう、私にとって多くはそこにあるのですから。こうして私は誇りに思っただけなのです、そ

³ Paul Celan an Ruth Lackner, Innsbruck, 6.7.1948. In: Israel Chalfen: Paul Celan. Eine Biographie seiner Jugend. Frankfurt/M. 1979, S.155

⁴ ただし詩集のタイトルは『私の青いピアノ（Mein blaues Klavier）』。

して何よりもまずあなたに感謝します、親愛なる大切なシュペルバーさん... (老人の娘、ビルギット・フォン・フィッカーは父親とおなじく詩について多くを知っている人です)⁵

1922年にフィッカーは、出征先のクラカウで埋葬されて以降行方知れずとなっていたトラークルの墓を人づてに発見する。遺骨は 1925 年になってようやくオーストリアに送られてもどされた⁶。しかしトラークルの故郷であるザルツブルクではなく、フィッカーとブレンナー・サークルの活動拠点であるインスブルックに。ツェランが手紙のなかで述べているように、トラークルが眠るインスブルック・ミューラウ墓地はフィッカーの家から目と鼻の先に位置する。老編集者は生前、文字通りトラークルの墓守りであり、1967年の死後はみずからもトラークルのすぐ隣に寄り添うように埋葬された。このことから、フィッカーがトラークルの死後にもっとも心をくいだいたのが、ほかならぬブレンナー・サークルによる作品の管理と詩人像の確立であったことが分かるだろう。1925年におこなわれた遺骨の「帰郷 (Heimführung)」もそのためのひとつの儀式とみなされる⁷。

トラークル像をめぐる後々までつづくことになるブレンナー・サークルと第三者のあいだの争いは 1925 年のインスブルックでの墓の建立とともに始まった。トラークルを文学史的にどのように位置づけるかは、直接にフィッカーと雑誌『ブレンナー』の歴史的評価を左右する目印になっていった。後期ブレンナー・サークルの中心人物の一人であったツァンゲルレによると、1910 年から 1954 年までつづいた雑誌『ブレンナー』の長い活動はその中心思想の推移によって三つの時期に大別される。そのなかで 1925 年は、第三期、すなわちブレンナー・サークルの思想的最終段階のはじまる年にあたり、そこでカトリックへの回帰が起こったと説明される⁸。ブレンナー・サークルのカトリック思想では、詩人は「予見者 (Seher)」として、詩作品は「啓示 (Offenbarung)」として位置付けられ

⁵ Paul Celan an Alfred Margul-Sperber, Innsbruck, 6.7.1948. In: Neue Literatur (Bukarest), 26 1975, H.7, S.50-63, hier S.52f.

⁶ トラークルの亡骸の輸送については以下の論文を参照されたい。Hans Szklenar: Die Überführung Georg Trakls von Krakau nach Mühlau. In: Untersuchungen zum „Brenner“. Festschrift für Ignaz Zangerle zum 75. Geburtstag. Hg. Walter Methlagl, Eberhard Sauermann und Sigurd Paul Scheichl. Salzburg/Wien 1981, S.398-409

⁷ フィッカーは自分が発見し、育てた詩人トラークルの文学的評価について最後まで特権的であろうとしつづけた。1954 年に出版された『ブレンナー』最終号においてもフィッカーはインスブルックという街がトラークルにとって「故郷以上のものであった」ことを強調している。Ludwig von Ficker: Das Vermächtnis Georg Trakls. Dem Herausgeber der Salzburger Gesamtausgabe von Trakls Dichtungen in einem Rückblick zugeordnet. In: Ders.: Denkkzettel und Danksagungen. Aufsätze/Reden. München 1967, S.222-254, hier S.226

⁸ Ignaz Zangerle: Zeit und Stunde. Der geistesgeschichtliche Weg des „Brenner“ (1910-1954). In: Literaturwissenschaftliches Jahrbuch. Im Auftrag der Görres-Gesellschaft. Neue Folge/Bd.19. 1978, S.189-198, hier S.190f.

重要視された⁹。これ以後、1969年にヴァルター・キリーとハンス・スツクレナールによる歴史批判版が出版されるまで¹⁰、トラークル研究においてはつねに、このブレンナー・サークルにおけるカトリック思想が影響力を行使することとなった。

＊

ツェランがフィッカーの前で朗読した詩のひとつは「死のフーガ (Todesfuge)」であったといわれる¹¹。第三帝国期には、中期ブレンナーの思想的支柱テオドーア・ヘッカーに執筆禁止処分が下され、1940年には雑誌そのものが発行禁止になった。この厳しい時代をへてようやく 1946年に再刊にこぎつけたフィッカーにとって、1948年のユダヤ人詩人ツェランとの接触がどのようなことを意味したのかは、当時の歴史をふりかえることなくして考えられない。

ツェランとの会話のなかでおもむろにフィッカーが言及したラスカー＝シューラーは、1914年11月のトラークルの死とそれにつづく初期ブレンナー・サークルの思想的終焉のち、『ブレンナー』誌上からは姿を消していた。第三帝国期にながら禁止されていたユダヤ人詩人ラスカー＝シューラーを再評価しようという機運はこの時期においてブレンナー・サークルにかぎるものではなかった。したがって、フィッカーの発言はけっして単なる感想ではなく、ツェランを前にした重要な態度決定であり、同時期にかれがラスカー＝シューラーについて文章を書いたこととおなじく¹²、大枠としてこの歴史的背景をもつ

⁹ 第三期のブレンナー・サークルが詩人というものをどのように理解しようとしたかについては以下の論文を参照されたい。Alfred Doppler: Georg Trakl als Vorbild für die Bestimmung des Dichters im ‚Brenner‘ nach 1945. In: Ders.: Die Lyrik Georg Trakls. Beiträge zur poetischen Verfahrensweise und zur Wirkungsgeschichte. Salzburg 2001, S.178-186

¹⁰ 1969年のキリーとスツクレナールによる批判版の刊行はトラークル受容史において範例転換をうながす決定的な出来事のひとつであった。ブレンナー出版から 1919年に出版されたカール・レック編集になる『文芸作品 (Die Dichtungen)』とフィッカー自身が編集した『ゲオルク・トラークルの思い出 (Erinnerung an Georg Trakl)』の出版までの経緯とその後、とくにヴォルフガング・シュネーディッツの手になるザルツブルク版三巻本に対する『ブレンナー』誌上でのフィッカーの非難は、いずれもトラークルの死後における一種の著作権争いとして理解される。この争いがキリー/スツクレナール批判版出版へのフィッカーの譲歩を引き出すきっかけとなったことは間違いない。1960年にフィッカーがベルリン自由大学から名誉博士号を授与された際の講演には、キリー、スツクレナール、ハイデガーらが列席したが、その祝いの場でもトラークルの作品管理をめぐるフィッカーの神経質な様子が認められる(キリーとスツクレナールによる批判版編集への着手がトラークルの作品とその管理者であるフィッカーにたいする誠実さをもってなされるという取り決めを二人の前で再度強調している)。批判版はフィッカーに捧げられた。Ludwig von Ficker: Danksagung. In: Denkwort und Danksagungen. S.267-281, hier S.271

¹¹ フィッカーの娘ビルギットの報告による。Ludwig von Ficker: Briefwechsel 1940-1967. Hg. Martin Alber, Walter Methlagl, Anton Unterkircher, Franz Seyr und Ignaz Zangerle. Innsbruck 1996, S.511

¹² Vgl. Ludwig von Ficker: Zur religiösen Bedeutung der Dichterin Else Laskar-Schüler. In: Denkwort und Danksagungen, S.166-169

ている。さきのツァンゲルレは 1925 年以降の『ブレンナー』をひとえに「カトリック期」にあるとして、それ以上に細かく区分することをしなかった。だからといって『ブレンナー』が 1945 年の大きな歴史的変化から免れてあるはずがない。1925 年以降の、「カトリック期」のブレンナー・サークルにもどこかに思想的変化の徴があるにちがいない。1948 年のインスブルックにおけるフィッカーとツェランのエピソードも、こうした背景を理解した上で捉えなおすことが必要だろう。「とりわけ嬉しかったのは、かれがしっかりと私の詩のユダヤ的なものに言及したことでした—お分かりでしょう、私にとって多くはそこにあるのですから」。シュペルバー宛ての手紙のこの箇所は、同時にフィッカーの言葉への失意をあらわすものとしても読むことができる¹³。ぎこちない朗読後にフィッカーの口から洩れたのは、かれをはるばるブカレストからインスブルックへと導いたトラークルではなく、ツェラン自身「ずっと乏しい結びつき」しか認めないというラスカー=シューラーであったからだ。さらにこのフィッカーの発言からは、ラスカー=シューラーと『ブレンナー』の結びつき、すなわち 1945 年に亡命先のイェルサレムで死去したこのユダヤ女性の詩をかつて同誌が積極的に掲載していたことを強調したいという意図も透けて見える。

そうとはいえ現実には、ブレンナー誌上に最後に掲載されたラスカー=シューラーの作品は、1914 年 7 月 1 日発行の『ブレンナー』第 4 年度分冊 19 所収の散文『マリク (Der Malik)』であり、1921 年頃までは雑誌巻末のブレンナー文庫広告欄にかろうじてその名を確認することができるものの、それ以後は文字通り姿を消す。ツァンゲルレの区分によれば、第一次世界大戦がはじまった 1914 年は、ブレンナー・サークルの思想的第二段階「キリスト教期」への移行期にあたるという。具体的な変化としては、『ブレンナー』が創刊時から手本とした批評家カール・クラウスとその機関紙『ファッケル (Die Fackel)』との盟友関係に、第一次世界大戦に対する態度をめぐって亀裂が入った¹⁴。ブレンナー・

¹³ Otto Pöggeler: *Spur des Worts. Zur Lyrik Paul Celans*. Freiburg/München 1986, S.250

¹⁴ フィッカーも大戦勃発当初は周囲の愛国的熱狂から自由ではなかった。1915 年に南部戦線から帰郷したフィッカーが刊行した『ブレンナー年鑑 1915 (Brenner-Jahrbuch 1915)』はクラカウで自殺したトラークルの遺作を含む事実上の追悼号となっている。この号の性格をめぐっては、クラウスの『ファッケル』と並ぶ反戦の書であるという主張がブレンナー・サークルの一部からなされてきた歴史的経緯があるが、私見では論者の多くがその際に第二次大戦中のブレンナーの苦難を前提としているように思われる。むしろザオアーマンが指摘するように、フィッカーもトラークルも当初は戦争に熱狂したが、その推移とともに次第に戦争を内面化し、やがては沈黙へといたったと捉えるのが適切ではないか。したがって『ブレンナー年鑑 1915』には、軍服姿のトラークルの写真など、当初の雰囲気伝える要素を見つけることができる。ちなみにクラウスは盟友フィッカーの年鑑についてめずらしく言及することが少なかった。またかれはトラークルの死後すぐの 1914 年 12 月 16 日ウィーンでの朗読会で追悼の意をこめて詩二篇（「少年エーリスによせて (An den Knaben Elis)」と「古い記念帳に (In ein altes Stammbuch)」）を読んでいるが、その選択基準がフィッカーのそれとまったく異なっていることは一目瞭然である。『ブレンナー年鑑 1915』の成立経緯と受容については以下の論文を参照されたい。Eberhard Sauermann: *Das „Brenner-Jahrbuch 1915“ und seine Rezeption. Trakl-Verehrung oder Kriegsgegnerschaft?* In: *Mitteilungen aus dem Brenner-Archiv*. Nr.20. 2001, S.35-55

サークルにおける反ユダヤ主義の浸透もその一因をになった¹⁵。おなじことがラスカー＝シューラーと『ブレンナー』についても推測されるのではないだろうか。初期ブレンナーを代表するダラーゴから中期・後期を牽引するヘッカーへと思想的中心点が移っていく過程は、ブレンナー・サークルにおいてはヨーロッパ的合理主義の否定として理解された表現主義から、キルケゴールを精神的支えとしたキリスト教へのラディカルな回帰として理解されたが、ヘッカーの意図とは別に、ユダヤ的要素の排除、浄化の性質を否定しがたく内包してもいた。

＊

ツェランが自作を朗読したおりのフィッカーのコメント、君には「ラスカー＝シューラーの遺産を相続する資格がある」は、1910年から二つの大戦を経験した長い歴史をもつ雑誌『ブレンナー』の思想的展開と無縁ではない。それどころか詩人トラークルの発見者、庇護者、その死後の「代理人」としてのみずからの力にきわめて意識的であったフィッカーによる一種の自己弁明であったとさえ言えるかもしれない。そこには老編集者のしたたかさがあった。フィッカーの発言によってトラークルは、第一次大戦前にゲオルゲ派の影響下で¹⁶ヘルダーリンの後裔に位置づけられた時とおなじように、ラスカー＝シューラーの名とともに記念された。すなわち 1954 年の聖霊降臨祭に刊行された『ブレンナー』最終号の後記「墓にさす曙光 (Frühlicht über den Gräbern)」第三章「ゲオルク・トラークルの遺産 (Das Vermächtnis Georg Trakls)」のなかで、フィッカーは実に三十年ぶりにラスカー＝シューラーに言及したのだ。そこで彼女はトラークルとともに、「予見者である詩人としてのかれらのメッセージにある宗教的動因を本質的に顧みる、悲劇的代表人物」とされた¹⁷。第三帝国期にトラークルは好んで読まれた詩人ではなかったとはいえ、ラスカー＝シューラーのように燃やされることはなかった。二人のあいだには、お互いの詩を捧げあうなど親しい交流があったが、1954年にフィッカーが二人をならべて「予見者」と位置付けることには違和感を抱いてしまう。とりわけ宗教詩人パウラ・シュリーアをトラークルの後裔として位置付けた 1946 年以降において、ラスカー＝シューラーのユダヤ性はカトリック期ブレンナー・サークルにとっては、本質的に受け入れられないものであったはずだ。

1948年インスブルックにおける出来事について、ツェランが恋人ラックナーと年長の友人シュペルバーに書き分けた手紙を比べれば、ツェラン自身がフィッカーの発言に一面に

¹⁵ カール・クラウスとチロルの反ユダヤ主義詩人らについては以下の小論文を参照されたい。
Eberhard Sauermann: „Tiroler Kriegsdichter“ oder „Deutscher Heiland“? In: Kraus Hefte. Hef21. Januar 1982, S.6-12

¹⁶ ゲオルゲ派のブレンナー・サークルにおける受容については以下の論文を参照されたい。
Sieglinde Klettenhammer: Stefan George und seine „Jünger“ in der Provinz. Das Verhältnis der „Brenner“-Gruppe zum George-Kreis. In: George-Jahrbuch. Bd.3. 2000/2001, S.76-118

¹⁷ Ludwig von Ficker: Das Vermächtnis Georg Trakls. S.240

において喜びつつもまた、そのような自己を別の目で冷静に観察していることが分かる。してみると、このパリへの亡命途上におけるツェランとフィッカーの出会い、バジルとジャネを仲立ちとして、ツェランとフィッカー自身によって用意され、運ばれ、かつ記録された、戦後オーストリア抒情詩の展開においてきわめて重要な演出であったと見なすことができるかもしれない。自分の詩の発表先を野心的に探していた若いツェランにとって、顔の広いフィッカーとの面識はとても魅力的であったし、フィッカーにとって戦後オーストリア抒情詩の舞台に姿をあらわしたユダヤ人シュールレアリストとの交流は、その長い歴史をふり返ればけっして疑わしいところもないわけではない、かれと雑誌『ブレンナー』の正当化にとって肯定的に量られた。

ツェランは8日にふたたびパリへと旅立った。この短いインスブルック訪問以降も二人のあいだにはほそぼそと、それでも途切れることのない交流がつづくことになる。

2. ツェランによるトラークルの研究

第二次大戦後にトラークルは積極的に読まれた詩人の一人であった¹⁸。ツェランをフィッカーに紹介したオットー・バジルが編集する雑誌『プラン (Plan)』はウィーンを中心にあたらしい文学運動の展開に寄与したが、その「若者の声」と題された第七分冊には「ゲオルク・トラークルへの信条告白 (Bekenntnis zu Georg Trakl)」¹⁹と題された綱領が載っている。それは16歳から25歳までの若い作家たちがその「父親の世代に属する」ところのトラークルの作品に戦後において積極的に接続しようというもので、「ゲオルク・トラークルの後裔 (Georg Trakls Nachfolge)」という署名にはハンス・ハインツ・ハーネル、ヘルマン・フリードル、オスカー・ザンドナー、ルドルフ・リント、ハンス・ムカロフスキー、ハンス・バオゼンヴァインが名を連ねた。バジルの雑誌『プラン』はそもそもそのはじまりにおいてフィッカーとその『ブレンナー』を手本にしていた。バジル自身が後年トラークルの伝記を書いている。ウィーンのツェランもまたこのような文学的雰囲気の中かにいたことは覚えておく必要がある²⁰。

¹⁸ 「トラークル風になる (trakeln)」という言葉も生まれた。Gespräch mit H. C. Artmann (Salzburg). In: Antworten auf Georg Trakl. Trakl-Studien. Bd.18. Hg. Adrien Finck und Hans Weichselbaum. Salzburg 1992, S.48f., hier S.48

¹⁹ Bekenntnis zu Georg Trakl. In: Plan. Literatur/Kunst/Kultur. Juli 1946, H.7, S.554

²⁰ 戦後に『ブレンナー』はもはや往年の影響力を持たなかったが、フィッカーの存在は若い作家たちから一目置かれるものであった。Anton Unterkircher: Ludwig von Ficker. In: Zeitmesser. 100 Jahre „Brenner“. Innsbruck 2010, S.31-55, hier S.53

ツェランにおけるトラークル受容についてはすでにいくつかの研究がある²¹。グルーベはそれをおおきく二つの時期にわけて考える²²。まず広く認められているツェランの創作活動の初期に見られる影響である。これはちょうどツェランがインスブルックを訪問した時期とも重なるものだ。グルーベの主張の新しさは、ツェランにおけるトラークル受容はこの時期にかぎるものではなく、50年代後半の現象学を研究していた時期に再度の集中的研究がなされており、結果としてツェランの詩人としての活動全体に影響を及ぼすものとなったとする点にある²³。

本稿はこのグルーベの見解に大きくよりつつ第一詩集『骨壺のなかからの砂 (Der Sand aus den Urnen)』所収の詩「フランスの思い出 (Erinnerung an Frankreich)」を分析し、具体的にツェランがどのようなかたちでトラークルの影響を受けたのかを確かめる。

＊

チェルノヴィッツ期からウィーンでの『骨壺のなかからの砂』上梓にいたるまでの創作初期にトラークルの影響が指摘されるのは、詩「秋 (Herbst)」におけるトラークルの「嘆き (Klage)」、「聖歌 (Psalm)」、「別れを告げた者の歌 (Gesang des Abgeschiedenen)」との類似にみられるような²⁴、「語の継ぎ方と音楽性」²⁵といった詩作上の技術においてである。ベッシェンシュタインが報告しているように、ツェランの蔵書のなかの『文芸作品 (Die Dichtungen)』における書き込みはとりわけ詩における色彩の使用にむけられたものだった。トラークルの詩における色彩は、ゴルトマンがおこなったような深層心理学的象徴解釈²⁶とその範例化によっては読み解かれず、むしろル・リダーが述べるように、あらゆる分類や意味化を拒む「秘密コードと秘密言語」²⁷である。それは

²¹ 代表的なものとして以下のものがある。Bernhard Böschstein: Celan als Leser Trakls. In: Ders.: Von Morgen nach Abend. Filiationen der Dichtung von Hölderlin zu Celan. München 2006, S.278-292; Remy Colombat: Georg Trakl. In: Celan-Handbuch. Leben-Werk-Wirkung. Hg. Markus May, Peter Goßens und Jürgen Lehmann. Stuttgart/Weimar 2008, S.302-304; Christoph Grube: „so oder so, es bleibt blau oder braun, das Gedicht“ Aspekte der Trakl-Rezeption Paul Celans. Würzburg 2013

²² Grube: a. a. O., S.10

²³ グルーベの主張を裏付けるのは、これまでツェランの蔵書のなかにはトラークルの本は二冊しかないと考えられていたが、実は5冊あったという新事実である。そのうちの二冊は1956年にパリで出版された独仏対訳版であった。Ebd., S.12

²⁴ Ebd., S.15f.

²⁵ Pöggeler: a. a. O. S.250

²⁶ Vgl. Heinrich Goldmann: Katabasis. Eine tiefenpsychologische Studie zur Symbolik der Dichtungen Georg Trakls. Trakl-Studien. Bd.4. Salzburg 1957

²⁷ Jacques Le Rider: Zur Intermedialität von Text und Bild bei Trakl. In: Georg Trakl und die literarische Moderne. Hg. Karoly Csuri. Tübingen 2009, S.113-122, hier S.118

色彩語の属する文脈によって玉虫のように変化する。それらの語の審級としてあるのはトラークルの詩のもつ「音性 (Lautlichkeit)」²⁸である。

たとえば、詩「錯乱 (Delirium)」は「黒い雪 (Der schwarze Schnee)」という語とともににはじまる。一般的に雪は白色とむすびついてイメージされるため、ここでの「黒い」という形容詞の使用、撞着語法は読者の意識にひっかかるものだ。しかしここで、なぜ雪が黒いとされるのか、そして黒い色にはなにか特別なメッセージが込められているのはいかといひを立て、他のトラークルの詩における黒い色の用いられ方はどうか、この特徴的な色彩にはトラークル固有の意味があるにちがいないと類推してはいけない。「黒い雪」という語法は、詩作品をテキスト生成的に読解すれば、いともたやすく説明されるのだ。もともとこの詩の第一稿では「黒い雪」の代わりに「黒い汚物 (Der schwarze Kot)」と書かれていた²⁹。トラークルはこの語を第二稿ではじめて「黒い雪」へと改めたのだ。その際に修正されたのが色彩ではなく名詞であったということは注意される必要がある。推敲過程において黒い色は、その色を生み出すところのものから自律し、作品中に残った。しかしなぜそのような推敲がおこなわれたのか。その理由は意味からではなく、詩作品の音楽への注目から説明される。この詩の音楽性をつくるひとつの特徴として子音の組み合わせ Sch/St/Sp から生まれる音の連なりを指摘することができる。具体的には、第一行の「黒い雪」、第二行の「額 (Stime)」、第四行の「死んだ鏡 (erstorbene Spiegel)」、第五行の「重い作品 (schwere Stücke)」、第六行の「影 (Schatten)」と「鏡 (Spiegel)」。³⁰したがって問題の「黒い雪」はこの子音の組み合わせを補強するために推敲されたと考えられる。そもそも詩的形象とそこから解釈学的に導かれる意味にたいして音が優位しているのだ。トラークルの作品における色彩の使用については広くこうした解釈が有効である³⁰。

このような音を媒介とした色彩の自律化がもたらす詩的効果とはなんだろうか。わたしたちの社会は音や色彩といった感覚の分節化によって成り立っているのだから、色彩と音の結びつき、そしてそこから生まれる諸感覚の意味からの離反は、ギムナジウム、家庭、軍隊、戦争といったさまざまな近代規範の根幹にある言語を、言語芸術みずからにおいて、その前提とする言語的自明性からの逸脱を促し、再発見された〈音声〉へと遡らせるもの

²⁸ Moritz Bassler: Wie Trakls *Verwandlung des Bösen* gemacht ist. In: Interpretationen. Gedichte von Georg Trakl. Hg. Hans-Georg Kemper. Stuttgart 1999, S.121-141, hier S.125

²⁹ Georg Trakl: Sämtliche Werke und Briefwechsel. Innsbrucker Ausgabe. Historisch-kritische Ausgabe mit Faksimiles der handschriftlichen Texte Trakls. Bd.2. Dichtungen Sommer 1912 bis Frühjahr 1913. Hg. Eberhard Sauermann und Hermann Zwerschina. Basel/Frankfurt/M 1995, S.321ff.

³⁰ 同じような例として、散文詩「啓示と没落 (Offenbarung und Untergang)」第一詩連における抹消箇所1の推敲経過をすでに指摘したことがある。ここでは名詞 *Sohlen* にかかる形容詞が *feurigen* から *silbemen* に変更されているのだが、その理由はやはり二つの語に共通する子音 S と L の反復によった音的強化であったと考えられる。詳しくは拙論「ゲオルク・トラークルの散文詩の位置 (1): 散文詩「啓示と没落」と戯曲断片「小作人の小屋で...」草稿の比較分析」(『詩・言語』73号 2010 S.39-56.)を参照されたい。

である。そしてツェランがトラークルから学んだところの色彩語法というのも、「黒いミルク (schwarze Milch)」³¹や「黒い雪片 (schwarze Flocken)」³²という語が収容所とホロコーストの主題と切り離せないように、詩作品における審美的効果をこえてより広い社会的、歴史的コンテクストを揺さぶる戦略としてであった。

＊

つづいてツェランの詩「フランスの思い出 (Erinnerung an Frankreich)」³³を例にとり、上述のツェランによる色彩語法を中心としたトラークル受容を具体的に確かめたいと思う。

Erinnerung an Frankreich

Du denk mit mir: der Himmel von Paris, die große Herbstzeitlose...

Wir kauften Herzen bei den Blumenmädchen:

sie waren blau und blühten auf im Wasser.

Es fing zu regnen an in unserer Stube,

und unser Nachbar kam, Monsieur Le Songe, ein hager Männlein.

Wir spielten Karten, ich verlor die Augensterne;

du liehst dein Haar mir, ich verlors, er schlug uns nieder.

Er trat zur Tür hinaus, der Regen folgt' ihm.

Wir waren tot und konnten atmen.

フランスの思い出

君、考えてごらん僕と。パリの空、大きなイヌサフラン...

僕たちは花売り娘たちのもとで心臓を買った。

それは青くて水のなかに花ひらいた。

僕たちの小部屋のなかで雨が降りはじめた、

そして僕たちの隣人が来た、ル・ソンジュ氏、痩せた小男。

³¹ Paul Celan: Die Gedichte. Kommentierte Gesamtausgabe in einem Band. Hg. Barbara Wiedemann. Frankfurt/M 2003, S.40f.

³² 詩「黒い雪片」はツェランの両親の収容所での死を扱っているとされる。Ebd., S.588ff.

³³ Ebd., S.34f.

僕たちはカードをした、僕は瞳を失った。
君は髪を僕に貸してくれた、僕はそれを失った、かれが僕たちを打ちのめした。
かれは扉へとむかった、雨がかれにしたがった。
僕たちは死んでいて呼吸できた。

この詩は 1946 年にルーマニアで書かれたツェランの最初期に属する作品のひとつであり、すでに述べたかれによるトラークル受容の第一期に属する。タイトルが示すように記憶の枠構造をかりて夢のような場景が語られる。その際に中心となるのが青色である。第三行にある形容詞「青 (blau)」は第二行の「花売り娘 (Blumenmädchen)」と第三行の「花ひらいた (blühten auf)」と頭韻をつくりつつ、読点をまたいだ第六行にある「瞳」と半韻をつくっている。ツェランにおいても色彩語は作品の音楽的效果と密接にむすびつけられて選ばれている。コンコルダンツを参照すると、ツェランの作品にあらわれる青色は白、金、黒色ほど多くはない³⁴。そのためここで青が用いられていることは目立っているのみならず、この詩では青色が主題化されていると考えることも可能だ。その青いとされる Herzen は先の行のイヌサフラン (Herbstzeitlose) とともに音をとおして結びつきつつ、似た名前をもつ植物ケマンソウ (Tränendes Herz) にまで広がりをもつ。この語はもともと「心臓」を意味し、賭け事の質として「瞳」や「髪」といった身体部位を失ってゆく詩のなかにあるため、花の名と身体部位を同時に示す二義性が詩的效果の中心にあるのは明らかだ。最終行の「僕ら」の死んでいると同時に生きている状態は、「心臓」が「花芯(Herz)」になることで、赤色が青色になることで実現されている。

ツェランにおける色彩の使用はトラークルと比較してそれほど多いわけではないし、「フランスの思い出」においてもトラークルと比較しうるような色彩の自律化は見られない。しかしツェランは色彩を視覚的效果として用いるのみならず、詩作品の音楽的效果とむすびつけることで詩の表現を広げていた。これはトラークルとツェランを文学史的にむすびつける。おなじく詩の音楽的效果の傑出した例として「死のフーガ」におけるたった一度の脚韻「かれは君に正確に狙いを当てる (Er trifft dich genau)」と「かれの瞳は青い (Sein Auge ist blau)」³⁵がある。ブロンドで青い目をしたドイツの男が人を殺す際にしめす「正確さ」はちょうど、オーストリアの詩人トラークルやツェランもその後裔に位置づけられるところの〈マイスタージンガー〉の文化の反転である。「死のフーガ」のなかには、先に言及した有名な撞着語法「黒いミルク」もある。それはトラークルの「黒い雪」をじゅうぶん思い起こさせるものだ。さらに、直接にツェランの両親の死をあつかった詩「黒い雪片」をみれば、その相似は一目瞭然である。トラークルの実人生の苦しさに関わ

³⁴ Index zur Lyrik Paul Celans. Hg. Karsten Hvidfelt Nielsen und Harald Pors. München 1981, S.289ff.

³⁵ Celan: a. a. O., S.40f.

りをもつだろう、詩における色彩の自律化、ツェランはそれをさらに押しすすめることで、かれの中・後期作品の中心となる「より灰色をした言葉 (grauere Sprache)」³⁶という考えに行きついた。

3. フィッカーとハイデガー

文学研究者メトラグルは、雑誌『ブレンナー』を一貫した反戦雑誌として理解する論者の一人であるが、上述の 1948 年インスブルックにおけるフィッカーとツェランの出会いをふり振り返りつつ、これほど両者が接近したにもかかわらず、なぜツェランが『ブレンナー』の寄稿者にならなかったのかと問う。ツェラン自身が 1951 年 2 月 5 日付の手紙とともに『骨壺のなかからの砂』の改稿原稿をフィッカーに送って『ブレンナー』での発表の打診をしているからだ。

この時はただしい糸を紡いでいますか？それは糸を十分に長く紡ぎ、糸を紡ぎ終えますか？私はそう望まねばなりません！そこでは時が、課せられた、外界のことに煩わされない沈黙、話す - ことが - できないものであった沈黙、話す - 必要が - ないと思われた沈黙、そのようなものを織り込んでゆくところの糸、時がそのような糸のみでなく一違います、時が同時にまた、みずからをひとつの時へと、みずからを統べる時へと紡ぎゆく、これまで行く手を遮ったものすべてをこえてみずからを紡ぎ、ただわずかのほかの時間たちによって名指されうるようなひとつの時へと、紡ぎいたることを、私は望まねばなりません。私がここで言うのは、私があなたを前にして詩を朗読することを許された時のことです。³⁷

まるでかれの詩の一節であるかのような文体でツェランは、フィッカーに長い無沙汰を詫びる。こうして巧みに三年前のインスブルック訪問へと老人の思念を誘いだしたのち、ツェランはおもむろに手紙の目的を切り出す。

考えてください、親愛なるフィッカーさん、私を信じてください、あなたからいただいた手紙はただ、私が書くことができなかったために、今なお名指すことのできない

³⁶ Paul Celan: «Antwort auf eine Umfrage der Librairie Flinker, Paris (1958)». In: Ders.: Gesammelte Werke in sieben Bänden. Bd.3. Gedichte 3, Prosa, Reden. Hg. Beda Allemann und Stefan Riechert unter Mitwirkung von Rolf Bücher. Frankfurt/M. 2000, S.167f., hier S.167

³⁷ Paul Celan an Ludwig von Ficker. 5.2. 1951. In: Ludwig von Ficker: Briefwechsel 1940-1967, S.216f, hier S.216

何ものかによって手が麻痺していた、それだけのために、これほど長いあいだ答えられなかったのです！

ここにふたたび古い詩の草稿があります、二つ三つ新しいものをくわえて、それに関しては、かろうじて見つけれられるものを、以前とくらべてほんの少しですが、より明瞭に伝えることができたと思いますし、そう望んでいます。草稿を手元に置いておいてください。私があなたに一瞬の注意以上のものを詩に与えるようお願いできることが許されないことは承知しています。しかし私は、これらの詩があなたを介することで、まとめあげて印刷することのできる人の手にいたるならば、チャンスが与えられるとも感じるのです。というのは、私にはときおり、私がこれらの詩の囚人であり、同時に看守であるかのように思われるのです。しかしあまりにも声高に話してしまいました—お許しください！³⁸

ツェランが「あまりにも声高に話してしまいました」と暴露するのはツェランによるこれら自作の詩の来歴である。みずからがみずからの「詩の囚人であり、同時に看守である」という表現は読み手に否が応でも収容所での経験を思い起こさせるだろう。ツェランが手紙といっしょに送った原稿とは、ウィーンでの不本意な出版ののち書店から撤去させた『骨壺のなかからの砂』を改めた『罌粟と記憶 (Mohn und Gedächtnis)』のことだ。たしかにメトラグルが訝しがるように、フィッカーはその機会があるにもかかわらず、ツェランの詩を自分の雑誌に発表することはしなかった。フィッカーは慎重に、意識的に、ツェランをラスカー=シューラーの後継者として名指し、そうすることで『ブレンナー』第一期へと参照を促そうとしていたのだから、詩集の出版が難しくとも、ラスカー=シューラーの作品も掲載されたことのある『ブレンナー』上に数篇ツェランの詩を発表することはむずかしいことではなかったはずだ。またツェランのほうも、まったく期待できないわけではないからこそわざわざ改稿原稿を送り届けた。しかし結果として『ブレンナー』とツェランの共同作業は実現しなかった。『罌粟と記憶』はこの手紙から一年後の 1952 年にドイツ出版社から出版された。

しかしあらためて、フィッカーが一方においてツェランという新しい詩人に関心を示しながら、その作品を『ブレンナー』紙上において発表することに消極的であった理由は何だったのだろうか。実はこの時期にフィッカーはもう一人、戦後オーストリア詩の展開に深く関わることになる人物との交流をはじめている。哲学者のマルティン・ハイデガーである。ハイデガーは長年にわたり雑誌『ブレンナー』の定期購読者であり、はやくから詩人トラークルの作品に親しんでいたという³⁹。二人の交流のはじまりは、ハイデガーが

³⁸ Ebd., S.217

³⁹ Reinhard Mehring und Dieter Thomä: Leben und Werk Martin Heideggers im Kontext. In: Heidegger-Handbuch. Leben-Werk-Wirkung. Hg. Dieter Thomä. Stuttgart/Weimar 2003, S.515-540, hier S.517

1952年にビューラーヘーエでのトラークル追悼式にフィッカーを招待したことであった。その時ハイデガーが行った講演の原稿は一年後に「ゲオルク・トラークル その詩の論究 (Georg Trakl. Eine Erörterung seines Gedichtes)」というタイトルで雑誌『メルクーア (Der Merkur)』に発表された⁴⁰。そこでハイデガーは、1946年の『ブレンナー』誌上にあらためて掲載されたトラークルの詩「夕暮れの国の歌 (Abendländisches Lied)」、「魂の春 (Frühling der Seele)」、「別れを告げた者の歌 (Gesang des Abgeschiedenen)」を、かれのトラークル論における三つの鍵として引用する。ハイデガーの目的はトラークルの詩の場所を、語られずにとどまる「ただ一つの詩」を「開く (erörtern)」ことである。フィッカーとハイデガーのあいだに交わされた往復書簡を詳細に調査したヒンツェによると、当初フィッカーは、精読すればその内容にブレンナー・サークルの見解との相違がなくもない、ハイデガーのトラークル解釈にたいしていくつか注文をつけていたが⁴¹、ハイデガーの巧みな弁舌と「お世辞」⁴²におだてられてしだいに、ハイデガーのトラークル解釈によってこそ「宗教的人間であるかれにとっての、トラークルの作品にたいする最後の疑念、キリスト教の問題性が解決された」と考えるようになった⁴³。二人の友情では、「ミューラウにあるトラークルの墓の訪問と詩人の精神世界についての議論が中心となった。このようにしてフィッカーのうちに疑いような信念がかたちづくられた。それは、いまこの時からもはやトラークルの代理人としてのかれの審判任務においてただ一人ではないというもの、そうではなくて哲学者との同意において共同で仕事を果たすことができるというものであった」⁴⁴。

雑誌『ブレンナー』最終号の後記「補遺と補筆 (Nachträge und Notizen)」のなかの一節は1952年のハイデガーの講演とかれによるトラークル解釈に言及し、「いくつかの留保にもかかわらずブレンナーの側からも肯定される」⁴⁵とする。こうして巻末の「ブレンナーの終わり (Ende des Brenners)」という宣言は、約半世紀にわたってトラークル解釈を紡いできた『ブレンナー』が、ハイデガーの論文への参照指示でもって締めくくられたものと読まれる。ヤニクが指摘するように、カール・ダラーゴ、テオドーア・ヘッカー、フェルディナント・エプナーとつづき、最終的にカトリック思想に回帰したとされるブレンナ

⁴⁰ Martin Heidegger: Georg Trakl. Eine Erörterung seines Gedichtes. In: Merkur. Deutsche Zeitschrift für europäisches Denken. Nr.59. 1953, S.226-258

⁴¹ Diana Orendi Hinze: Heidegger und Trakl: Aus dem unveröffentlichten Briefwechsel Martin Heidegger-Ludwig von Ficker. In: Orbis Litterarum. Nr. 32. 1977, S.247-253, hier S.248

⁴² Ebd., S.249

⁴³ Ebd.

⁴⁴ Ebd.

⁴⁵ Nachträge und Notizen. In: Der Brenner. Halbmonatsschrift für Kunst und Kultur. 18. Folge. Pfingsten 1954, S.282

ー・サークルの最後期にもっとも影響力を発揮したのは意外なことにもハイデガーであった⁴⁶。

＊

こうしてルートヴィヒ・フォン・フィッカーはみずからのおよそ 45 年にもおよぶ編集者としての活動をハイデガーとの協力関係という大団円のうちに終えようと企図した。ところが、雑誌の廃刊以後 10 年の時の流れは、ビューラーヘーエで蜜月を迎えた二人の友情にも容赦しなかった。先に言及したヒンツェによれば、両者の関係は 1953 年から 1958 年のあいだに目につくほど冷え切っていった⁴⁷。1959 年のハイデガー 70 歳の誕生日にフィッカーが盛大な贈り物をしたことから、二人の間にはふたび頻繁な手紙のやりとりがはじまる。1960 年にフィッカーはインスブルックでベルリン自由大学の名誉博士号を授与されるが、その紹介スピーチはハイデガーがおこなった⁴⁸。しかし 1964 年に二人の関係は決定的なおわりをむかえる。それは「フィッカーにとっては確実に多くの苦しみをあたえる餌」⁴⁹となるものだった。1964 年はトラークルの没後 50 年にあたり、インスブルックではそのために州をあげて記念式典が計画されていた。フィッカーは書面で主賓としてハイデガーに講演を依頼したのだが、ハイデガーはそれをにべもなく断った。さらに辞退の理由として、老齢や多忙といった生活上の困難のみならず、1952 年にビューラーヘーエでおこなった自身の講演内容への不満を表明したのだ。

というのは以前にビューラーヘーエで試みられたこと、敢えてなされたことは、ただの手さぐりであったのです。今日わたしはトラークルの詩作品の唯一性をいっそうはっきりと見ますが、それにふさわしい思考と言葉の寄る辺なさ (Ratlosigkeit) と仲介のなさ (Mittellosigkeit) を認めるのです。ですからわたしは以前のものを繰り返したくありませんし、まったく不十分なことも言いたくありません。⁵⁰

さらにハイデガーは式典そのものへの参加も辞退する旨を述べる。それだけにフィッカーの落胆はかなりのものであった。

⁴⁶ Vgl. Allan Janik: Carl Dallago und Martin Heidegger. Über Anfang und Ende des ‚Brenner‘. In: Untersuchungen zum ‚Brenner‘. S.21-34

⁴⁷ Hinze: a. a. O., S.249

⁴⁸ Martin Heidegger: Ansprache. In: Martin Heidegger-Ludwig von Ficker. Briefwechsel 1952-1967. Hg. Matthias Flatscher. Stuttgart 2004, S.136f.

⁴⁹ Hinze: a. a. O., S.250

⁵⁰ Martin Heidegger: Brief an Ludwig von Ficker. 3. Juli 1964. In: Martin Heidegger-Ludwig von Ficker. Briefwechsel 1952-1967. S.91f.

そこにはひとつの境界があつて、それにぶつかるというのがおそらくわたしの天命に属するのでしょう。そしてこのような、つづけざまにあらゆる意志をこえて拒まれた者としてわたしは、おそらくかつて言葉で表現されたもののもとにとどまることができ、それを許され、そうせねばならないのです、そしてそれを、人が私を幸運にも〈紹介者〉としようとする善意をもっているところではどこでも、いやおうなしに、いわば事実として用いることが許されるのです。わたしが州、街、大学の要求に最大の喜びをもって答える際にともなう複雑な感情の暗示についてはこれだけです。⁵¹

フィッカーはさらにこのハイデガーからの手紙が「より高い了解からの別れの手紙 (Ein Abschiedsbrief aus einem höheren Einverständnis heraus)」であるとし、ハイデガーに丁寧な別れを告げる。こうして「かれの多くの出会いに恵まれた人生の最後の決定的な時期は終わった」⁵²。フィッカーとハイデガーのあいだには 1967 年のフィッカーの死までクリスマスや誕生日の挨拶が交わされるが、表面的な付き合いをこえた心の交流はもうその書面からうかがわれない。

＊

すでに述べたように、フィッカーとツェランの交流はツェランがパリに行ったあとにも途切れながらつづいた。しかしこちらも、1948年のインスブルックにおけるほどに二人の距離が縮まることはもうなかった。ここでもう一度メトラグルの問いを考えてみよう。なぜツェランの詩は『ブレンナー』に掲載されなかったのか。ウンターキルヒャーが指摘するように、編集者フィッカーは戦後『ブレンナー』の位置づけに際して、ツェランら若手の詩人にではなくハイデガーに期待したからである⁵³。ツェランか、それともハイデガーか、という選択がフィッカーの意識のなかにはっきりと形をとったのかは分からないが、奇しくも今日から振り返ってみると、二つの大戦と度重なる経済危機を乗り越えて存続した雑誌『ブレンナー』はツェランとハイデガーのあいだに立っていたと言える。第二次大戦後の『ブレンナー』にはもはや新しい文学的価値創造を切り開く力はなかったので、フィッカーは今日的観点からの『ブレンナー』の軌道修正に意をそそいだ。そして 1949 年からはじまった、ヴォルフガング・シュネーディッツによるザルツブルク版トラークル選集の刊行にたいしては、嫉妬をむき出しにして抗議した⁵⁴。みずからが発見し、庇護し、

⁵¹ Ludwig von Ficker: Brief an Martin Heidegger. 8. Juli 1964. In: Ebd., S.93

⁵² Hinze: a. a. O., S.251

⁵³ Unterkircher: a. a. O., S.54

⁵⁴ 1954 年の『ブレンナー』最終号所収の後記「トラークルの遺産」でフィッカーはとくに戯曲「青髭 (Blaubart)」の公表に憤っている。Doppler: a. a. O., S.186, Anm.10

育て、文学的価値評価を最初に打ち立てた詩人とその作品が、本人を直接に知らない人間の手によって、語りなおされ、異なった価値を付与されていくことはフィッカーにとって何よりもみずからの編集者としてのカリスマ性が衰えていくこととして知覚された。そこに突如あらわれたハイデガーは、フィッカーのそうした心情を巧みに操作し、信頼を得ることに成功した。1952年のビューラーヘーエでの講演と1953年の講演原稿の発表は、1946年に公職を追放されて1951年に復職したハイデガーにとって、公の場での最初の仕事に数えられる。おりしも好んで語られていた、ヘルダーリンとトラークルのあいだに連続性を見ようというブレンナー・サークルのもっとも重要なイデオロギーは、ハイデガーが自身の思想にみせかけの修正を施そうとする際に好都合の材料であった⁵⁵。こうして、1964年の手紙に至る二人の交友を追ってみれば、雑誌『ブレンナー』と編集長フィッカー、そしてトラークルの詩はハイデガーに利用されたのだとも思えなくない。しかし、亡命からドイツに戻ったヒルデ・ドミンが訝しく思った50年代の尋常でないトラークル・ブーム⁵⁶の火付け役を、皮肉なことにも、ハイデガーのトラークル論が果たしたこともまた否定できない。

4. 結語

今からおよそ100年前の1914年11月3日の夜に出征先のクラカウの野営病院で、コカインの過剰摂取のために27歳の若さで死んだゲオルク・トラークルとその作品は、その後さまざまな歴史的局面のなかで読み替えられてきた。トラークルの作品を出版し、庇護し、遺稿を管理し、文学的価値評価の第一歩を準備したフィッカーとブレンナー・サークルによる功績は疑いようがない。しかし同時に、あまりにも詩人に密着したがために、長いあいだ学問的な視点から詩人を捉えなおす試みを妨げたことも確かである。2013年に刊行されたアンソロジー『トラークル・エコー (Trakl-Echo)』⁵⁷を紐解けばそこに百篇以上ものトラークルにまつわる詩があるが、これほどまでに引用、解釈、語り直しを経験し、いまなお経験している詩人はめずらしい。ここで紹介したツェラン、フィッカー、ハイデガーのトラークル像をめぐる出会いと別れもそうしたひとつに数えられる。フィッカーに

⁵⁵ フィッカーの知人ルト・ホルヴィッツは1953年2月27日付の書簡で、1952年にフィッカーがハイデガーの招待を受けたこと、そしてハイデガーがみずからの国民社会主義への加担に対する責任を明確にすることのないまま、「あたかも1920年代からトラークルとブレンナーの精神のうちに生き、考え、感じていた」かのように振るまったことを許すことができないと非難している。Hinze: a. a. O., S.248f.

⁵⁶ Hilde Domin: Hilde Domin (Heidelberg). In: Antworten auf Georg Trakl. S.63

⁵⁷ Trakl-Echo. Poetische Trakl-Spuren aus 100 Jahren. Edition Brenner-Forum Bd.8. Hg. Hans Weichselbaum. Innsbruck/Wien/Bozen 2013

としてトラークルは「かれによってかろうじて発見された詩人」⁵⁸であり、近しく接した友であり、ブレンナーを代表する予見者であり、最終的には、ミューラウ墓地で寄り添う二つの墓を見ても分かるように、フィッカーの編集者としての人生そのものを意味した。ハイデガーにとってのトラークルとは、レイが批判したように、みずからの手によって加工されるテキストであった⁵⁹。トラークルの人生はハイデガーの関心の埒外にある。ツェランはどうであろうか。詩人として名をなす野心のためにトラークルに手を伸ばしたのであるか。グルーベはそのツェランにおけるトラークル受容についての著書の冒頭に興味深い考察をしている。かれによると 50 年代に撮影された有名なツェランの写真（椅子に座り、前かがみになって、手を組んでいる）とトラークルの写真の一枚が奇妙な相似をなしている。あたかもツェランにトラークルがのりうつったかのようなこの写真が撮られた時期にツェランはふたたびトラークルの研究に取り組んでいたという⁶⁰。「黒い雪片」などトラークルが用いたのとまったく同じ言葉がその作品中に見つかる。トラークルが故郷ザルツブルクから遠く離れた東方で孤独のうちに自殺したように、ツェランもまた故郷から西へ遠く離れたパリで錯乱のうちに自殺した。考えればたしかに、トラークルとツェランのあいだには多くの相似形を見つけることができる。トラークルのなにがツェランをそれほどまでに惹きつけたのだろうか。作家イルゼ・アイヒンガーはトラークルの奇妙な人生に着目して、ウィーンから鉄道で東方へ運ばれてその地に没した詩人の運命が 30 年後のユダヤ人たちの運命と相似をなしていることに注意をうながす⁶¹。ツェランもトラークルのうちにみずからのユダヤ性とつながる何かを感じていたかもしれない。あるいはトラークルを介してみずからにとっての「多くがそこにある」ユダヤ性をなにものかと結びつけることを祈っていたのだろうか。そうすれば 1948 年のフィッカーを前にした朗読の際に、ラスカー=シューラーの例えを聞いてツェランが喜びとともに覚えたという「失望」の意味も理解できよう。フィッカーととくにその妻による〈賛辞〉は、かれの多くを指したと同時にかれをある期待から隔ててもした。フィッカーはツェランに、「君にはトラークルの遺産を受け継ぐ資格がある」とは言わなかったのだ。

⁵⁸ Hinze: a. a. O., S.249

⁵⁹ W. H. Rey: Heidegger-Trakl: Einstimmiges Zwiegespräch. In: Deutsche Vierteljahresschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte. Bd.30. 1956, S.89-136, hier S.98

⁶⁰ Grube: a. a. O., S.8ff.

⁶¹ Ilse Aichinger: Georg Trakl. In: Absprung zur Weiterbesinnung. Geschichte und Medien bei Ilse Aichinger. Mit der Erstveröffentlichung des Radio-Essays *Georg Trakl* von Ilse Aichinger aus dem Jahr 1957. Hg. Christine Ivanovic und Sugi Shindo. Tübingen 2011, S.13-29, hier S.16f.

Ficker, Celan, Heidegger

Entwicklung der österreichischen Nachkriegslyrik und das Trakl-Bild nach 1945

Atsuhiko HINA

Am 5. Juli 1948 las Paul Celan im Haus Ludwig von Fickers in Innsbruck, wo jener unterwegs zu seinem Pariser Exil kurzen Halt machte, seine Gedichte vor. Wie seine Briefe Celans vom selben Tag belegen, hinterließ dieser Umweg bei Celan ambivalente Gefühle. Ficker, der Herausgeber der legendären halbmonatlichen Zeitschrift *Der Brenner*, äußerte ihm gegenüber nach dem Vortrag sorgfältig gewählte Worte, dass „Celan dazu berufen sei, das Erbe von Else Lasker-Schüler anzutreten“. Dieser hatte aber erwartet, den Namen von Georg Trakl zu hören, dessen Lyrik er seit seiner Czernowitzer Zeit intensiv gelesen hatte.

Aus heutiger Perspektive ist die Begegnung Celans mit Ficker als ein symbolisches Ereignis der österreichischen Nachkriegslyrik zu betrachten. Die Tiroler Zeitschrift *Der Brenner*, die im Jahr 1912 als expressionistische Zeitschrift begann und die zwei ihrer wichtigsten Beiträge in den beiden Dichtern Georg Trakl und Else Lasker-Schüler fand, wurde in der nationalsozialistischen Zeit mit einem Publikationsverbot belegt. Dennoch gab Ficker im Jahr 1946 bedeutungsvoll ein neues Heft heraus. Das markierte besonders unter den jungen Schriftstellern seinen Namen als „Prominenz“. Die Werke Trakls wurden zwar in der nationalsozialistischen Zeit nicht gerne gelesen, aber sie wurden auch nicht verbrannt. Otto Basil, der in der Nachkriegszeit nach dem Vorbild des *Brenners* seine Zeitschrift *Plan* publizierte und vielen jungen Schriftstellern, darunter beispielsweise auch Milo Dor und Ilse Aichinger, eine Publikationsmöglichkeit anbot, versuchte aktiv Trakl eine Vorbildrolle zuzuschreiben. Ficker und die Mitglieder des *Brenners* versuchten in dieser Zeit vehement, Trakl literarisch zu kanonisieren –und zwar schließlich als Gegenpol zur Kulturpolitik des dritten Reichs. Dabei wurde Trakl gewissermaßen verherrlicht, indem die Tatsache vergessen wurde, dass Trakl selbst begeistert und freiwillig an die Ostfront abgereist war. Dieser komplizierte Wiederauftritt Trakls darf nicht ohne einen Rückblick auf die damalige Kulturpolitik der Nachkriegszeit betrachtet werden. Die oben angeführte Äußerung Fickers zum Vortrag des jungen Surrealisten Celan steht gerade in diesem historischen Kontext. Ficker wollte damit hervorheben, dass seine Zeitschrift einmal nicht nur Trakl, sondern auch Lasker-Schüler Publikationsmöglichkeit bot, sowie ferner, dass Ficker seine Zeitschrift ursprünglich nach dem Vorbild der Wiener Zeitschrift *Die Fackel* und deren Herausgeber Karl Kraus organisierte. *Der Brenner* wäre vom Anfang an durchaus eine pazifistische Zeitschrift gewesen. Das manifestierte Ficker vor Celan, der durch Vermittlung seiner Wiener Freunde Otto Basil und Edgar Jene zu ihm eingeladen worden war, ganz bewusst und äußerst scharfsinnig. „Das Jüdische“, das Ficker bei Celan gefunden haben wollte und dadurch auf die ehemalige Beiträgerin Lasker-Schüler hinwies, enttäuschte hier paradoxerweise Celans Erwartung, als ein Nachkömmling von Georg Trakl anerkannt zu werden.

Im Hintergrund dieser Episode gab es noch eine unübersehbare Nebenlinie: die Begegnung Fickers mit dem Philosophen Martin Heidegger im Jahr 1952. Heidegger, der nach dem Krieg als Regimeanhänger vom öffentlichen Dienst ausgeschlossen worden war, trat erst im Jahr 1949 wieder an die Öffentlichkeit. Seine beiden Aufsätze über Trakl, *Die Sprache* (1950) und *Die Sprache im Gedicht. Eine Erörterung von Georg Trakls Gedicht* (1953), gehören zu den Arbeiten gerade aus dieser Zeit. Als Heidegger Ficker zu seiner Festrede in Bühlerhöhe einlud, begann die Freundschaft zwischen den beiden. Ficker, als Entdecker, Unterstützer und Verteidiger Trakls, war zuerst teilweise skeptisch gegenüber der Trakl-Interpretation Heideggers. Dennoch wurde er allmählich zur naiven Annahme geführt, dass seine lebenslang mühevoll umkämpfte Tätigkeit als Herausgeber des *Brenners* und Entdecker Trakls erst jetzt, mit dem Namen jenes weltbekannten Philosophen, belohnt werde. Im Jahr 1954 publizierte Ficker das letzte Heft des *Brenners*. Am Ende dieses Jahrbuchs stand als Wort des Herausgebers ein Hinweis auf Heideggers Aufsatz *Die Sprache im Gedicht* und der Verfasser bekundete seine Zustimmung für dessen Trakl-Verständnis. Ficker knüpfte also seine 40 jährige Trakl-Lektüre im *Brenner* an einem Aufsatz Heideggers an. Dies stellte den Höhepunkt der Freundschaft dar. Im Laufe der Zeit kühlte die Beziehung aber allmählich ab. Im Jahr 1964 bat Ficker Heidegger um einen festlichen Vortrag zum 50-jährigen Jubiläum des Todes Trakls, den dieser ohne weiteres ablehnte. Ferner äußerte Heidegger seine Unzufriedenheit an der Trakl-Interpretation, die er 10 Jahre zuvor verfasst hatte. Das verletzte den Stolz Fickers tief und beendete die Freundschaft endgültig.

Vom heutigen Standpunkt aus könnte man metaphorisch sagen, dass Ficker in den letzten Tagen seines Lebens zwischen zwei Polen stand; nämlich zwischen Celan und Heidegger. Ficker wählte für sich und sein ‚Trakl-Bild‘ den Philosophen Heidegger. Der junge Celan allerdings wurde gerade durch das Lob Fickers nachhaltig enttäuscht. Diese Enttäuschung musste Celan später, im Umgang mit Heidegger, erneut erfahren. Es ist beachtenswert, dass diese zwei Pole, ein Philosoph, der die wichtigsten poetologischen Aufsätze nach dem zweiten Weltkrieg schrieb und großen Einfluss auf die späteren Lyriker ausübte, sowie ein Lyriker, der ohne Zweifel zu den wichtigsten seiner Zeit zählte, in den 50er Jahren gerade um das Trakl-Bild positioniert waren.

In dieser Abhandlung versuchte ich hauptsächlich die komplizierte, oben beschriebene Entwicklungslinie der österreichischen Nachkriegslyrik anhand der Perspektive des Herausgebers zu rekonstruieren. Deren Ziel war, zu erklären, warum Georg Trakl in der Nachkriegszeit so gerne rezipiert wurde, und zu erkennen, wie diese sogenannte Trakl-Renaissance gestaltet wurde. Über die Trakl-Rezeption bei Celan existieren bereits einige aufschlussreiche Werke in der Sekundärliteratur, die sowohl textanalytisch als auch biographisch Trakls Einfluss auf die Werke Celans untersuchten. Ich übernahm deren Ergebnisse kritisch und baute sie mithilfe der neueren Arbeit von Christoph Grube, welche die Trakl-Rezeption bei Celan nicht nur auf die frühere Schaffungsphase beschränkt, sondern auch in den späteren Werken finden will, weiter aus. Dabei beachtete ich besonders die synästhetischen Wirkungen, die die Farbe im Gedicht evoziert. Beispielsweise zitierte ich Trakls Gedicht *Delirium*, wo die Konsonantenkette „Sch-“ beim Wechsel des Nomens in der Modifikation

des Textes (Kot→Schwarz) entscheidend wirkt. Die gleiche poetische Strategie fand ich in Celans Gedicht *Erinnerung an Frankreich*. Dort kombiniert Celan die Farbe „blau“, die er durch seine ganze Schaffungsphase wenig benutzte, lautlich mit der Konsonantenkette „bl-“. Die Farbe im Gedicht repräsentiert nicht nur eine semantische Wirkung, sondern sie trägt dabei auch einen musikalischen Effekt, der die Struktur eines Gedichts vielschichtig entwickeln kann. Diese poetische Strategie, die Celan wahrscheinlich von Trakl übernahm, zielt ferner auf die Erschütterung der menschlichen Empfindungen, die alle gesellschaftlichen Bedingungen als selbstverständlich voraussetzen.